

# 青木繁『海の幸』ゆかりの漁村のまちづくり

NPO法人安房文化遺産フォーラム 事務局長 池田 恵美子

1904（明治37）年夏、東京美術学校を卒業した青木繁は、友人の坂本繁二郎・森田恒友、恋人の福田たねとともに、写生旅行で房州布良を訪れた。路銀（旅費）がなくなり、漁家の小谷喜録宅に40日も滞在し世話になった。後に日本で最初の重要文化財となる西洋画『海の幸』をここで描き、『わだつみのいるこの宮』の構想が生まれた。

布良とはどんなところなのか。日露戦争のさ中、4人の若者をひと夏も無償で逗留させた小谷家とは。『海の幸』誕生の背景をみてみたい。



## 1. 『海の幸』が誕生した神話のふるさと

布良は、房総開拓神・天富命（アメノトミノミコト）が布を織る植物の栽培に適した土地を求めてやってきたといわれる神話の里である。布良と相浜は「天富命が上陸した岬」に由来して、富崎村といった。青木が「好い処で僕等の海水浴場だよ」と記しているアイド（阿由戸）の浜は、目の前に女神山・男神山がそびえ、水平線には伊豆の島々が並び、布良崎神社の2つの鳥居の間には富士山を拝むことができる。

♪ アーエ 伊豆じゃ稲取 房州じゃ布良よ  
粋な船頭衆の 出るところ

♪ アーエ 船頭させても とも取りやさせぬ  
押さえひかえが まゝならぬ

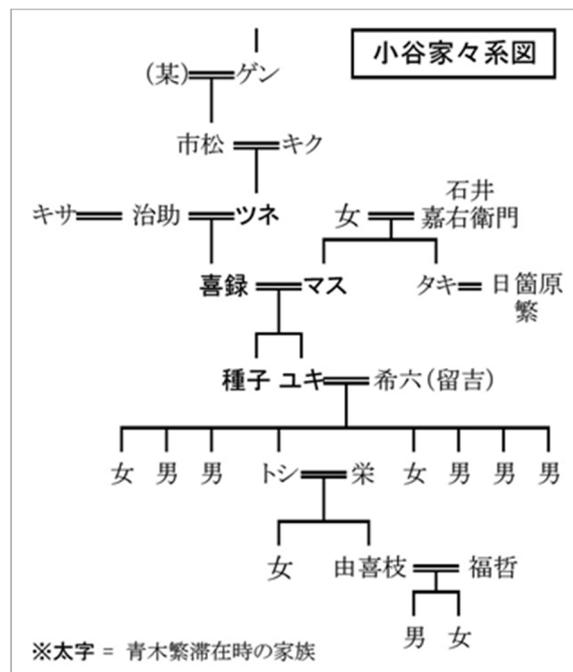
布良は古くからマグロはえ縄船発祥の地として栄えていた。『安房節』は、危険な漁撈に耐え、漁師たちが励まし合って歌った舟唄である。冬の荒海での漁は厳しく、遭難事故が絶えなかった。

亡くなった漁師の魂は星になるという伝承になり、赤く輝くカノーブスは「布良星」と呼ばれた。

神話に造詣の深い青木繁は、神話の里で神話の作品を描いた。布良滞在中、友人の梅野満雄に宛てた4枚の絵手紙には、この地の素晴らしさを賛美し、精力的に取り組んでいる大作『海の幸』への自信と精神の高揚が伺える。

## 2. 小谷家と富崎村

青木が滞在した小谷家は、屋号を「きろく」という。村の74軒を焼失した1889（明治22）年の大火で被災した後、現在の住宅が再建されたと考えられている。近年、当家より古い資料が多く発見されて調査研究が進み、沿革などが明らかになってきた。



鮮魚仲買商であった先代当主の治助は、漁師頭や村会議員等の要職を歴任し、日本赤十字社の社員（会員）や房総遠洋漁業株式会社の株主となっている。罹災窮民の救済や遭難救助、築港、漁業振興など、村政に大きな貢献を果たした。富崎村長より感謝状と銀杯を授与された1902（明治35）年、逝去している。

長男喜録は、十代から千葉や東京の私塾で和漢や算術、教育法などを学び、20歳で富崎尋常小学校の授業生（教員）となった。大火の翌年に依願退職して家業を継ぎ、後に村議員や帝国水難救済会布良救難所看守長を務めている。

1890（明治23）年8月には、水産伝習所（現東京海洋大学）1期生の実習で漁具指導などの世話をしており、所長の関澤明清からお礼の書簡と「日本重要水産動植物之図」が贈られている。小谷家の長押には3枚のカラー図版の魚貝図が掲示されており、パリ万博に出品されたものであることが分かった。梅野に宛てた絵手紙には40種もの魚貝名が記されているが、画家の青木は殊更この精密な魚貝図に関心を寄せ、実際に港で確認したのかもしれない。



このときキリスト者の内村鑑三も、水産伝習所の教師として実習に同行しており、神田吉右衛門翁に出会ったことが人生の転機になったと自著（『内村鑑三全集一余が聖書研究に従事するに至りし由来』）に記している。神田は、小谷治助・喜録とともに村政改革を実施した富崎村長であり、アワビ漁を村営化した共有財産で道路や漁港整備、学校設立などを行っている。全国的にも先進的な漁村だったと推察される。

青木の没後50年に際し、田村利男館山市長と職員らが福田たねを訪問した折の談話メモがある。「吉野家という旅館に一泊した。森田か坂本かの知り合いで、田村という医師を通して、小谷喜録を紹介され、6畳と8畳の二間を借りた。（中略）13,4歳くらいの女の子があって、家族4人で使用人が5,6人いた。『海の幸』はデッサンをして、東京で仕上げた。喜録で使っていた男を二人ばかり、雨の日などよくモデルと

した」と、たねは語ったという。

その当時の小谷家は、当主の喜録と妻マス、継母キサ、10歳の長女種子と6歳の次女ユキの5人家族であった。

たねは自らたね子と署名することもあり、小谷家の少女が自分と同名だと知っていれば憶えていたであろう。後年、ユキは「お客様の部屋に近づいてはいけないと言われていた。ある日障子に穴を開けて覗いたら、女の人の裸を描いていた」と、娘のトシ（現当主）に語っている。客扱いして娘たちを近寄せなかったのであれば、たねが少女の名を知らなかったことも推測できる。

種子は、富崎尋常小学校から千葉県女子師範学校に進学し、千葉県東葛飾郡川間尋常高等小学校の訓導になったが、21歳で急逝している。小谷家からは、治助や喜録が使った高等教育の専門教科書や議員の追悼句集、著名な書画なども見つかっている。『海の幸』誕生を支えた背景は、単なる漁村の漁家ではなく、文化的な漁村の教育熱心な家庭であったのである。

### 3. 青木繁「海の幸」記念碑

アイドの浜を見下ろす高台に、四角いアーチ型のモニュメントがある。足もとの碑盤には旧友・辻永の揮毫により「青木繁海の幸ゆかりの地」と刻まれ、裏側のプレートには「…画伯を敬慕し、その芸術を愛する者たちがあい寄り、没後50年を記念して、ゆかりのこの地に建立…」と趣意が彫られている。

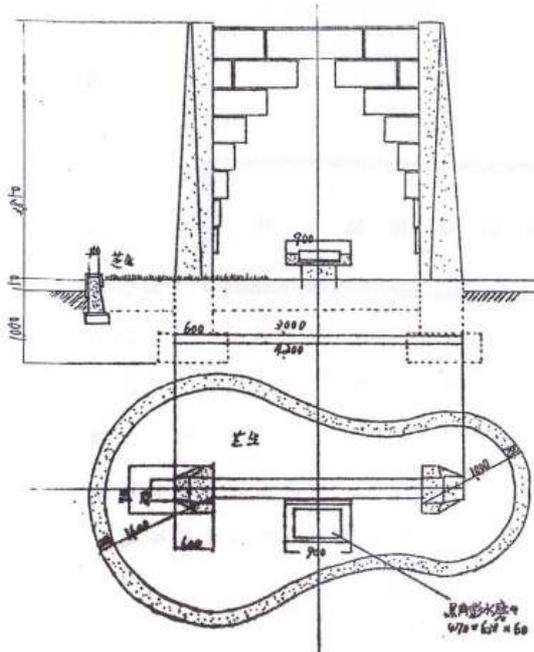


布良の国有地に千葉県営館山ユースホテル（YH）が建設された昭和36（1961）年は、青木繁の没後50年であった。田村利男館山市長と青木の旧友ら画壇の著名人らによって基金が集められ、翌年、隣接地に「海の幸」記念碑が建てられた。総工費約60万円のうち、石橋財団からも20万円の

助成を受けた。画家から提供された絵画作品は市長自ら上京して販売したと、当時の新聞で紹介されている。

設計はYHと同じく、ル・コルビジエなど欧米の現代建築を日本に紹介した東京大学教授の生田勉である。

碑のイメージは、ローマ神殿の廃墟と、夭逝した友人・立原道造の詩「石の柱」と、神式の幣帛などが混沌と混じり合って生まれたと生田は書き残している。



建立計画書や趣意書には「…碑は一つの芸術作品とも考えられ…」 「…この碑を美術振興の一つの道標といたしたいと念願…」などと、この碑にこめられた思いが記されている。除幕式には、福田たね・蘭童も遺族として列席している。

その後、YHが営業停止となった1998（平成10）年、隣接した記念碑にも解体の危機が及んだが、地元の人びとの熱意ある保存運動によって、碑は守られ後世に残されることとなった。

#### 4. 3つの「あゝ」のまちづくり

##### ～青木繁・安房節・アジの開き～

2005（平成17）年、富崎地区コミュニティ委員会とNPO法人安房文化遺産フォーラム（以下、NPOフォーラム）の共催により、「青木繁「海の幸」100年」から布良・相浜を見つめる集いが開かれた。少子高齢化の深刻な地区の活性化を目ざし、青木繁「海の幸」記念碑を保存する会（仮称）

が提案された。

このとき、小谷家当主の小谷栄氏より「古い我が家を壊そうと思っていたが、地域活性化のためなら、青木繁が滞在した当時のまま残し、皆さんで使ってほしい」という重大な発言があった。これを受け、個人住宅を公益活用するための検討が始まっていく。

水産業の衰退に伴い小規模校となった館山市立富崎小学校では、漁村文化を代表する青木繁・『安房節』・アジの開きの頭文字をとり、「3つの「あゝ」のふるさと学習」を実践していた。

少子高齢化がさらに進んで小学校は統合され休校となったが、「3つの「あゝ」のまちづくり」として市民活動に引き継がれた。青木繁の「あゝ」は、文化遺産の保存・活用。『安房節』の「あゝ」は、漁村の歴史文化の調査・研究。アジの開きの「あゝ」は、伝統的な漁村料理「おらがごっつお（我が家のご馳走）」や生活文化の継承。これらを通して地域活性化を願い、青木繁『海の幸』フォーラムやシンポジウム、まちづくり講座、ウォーキングガイドなどを実施している。

青木繁を敬愛し、文化遺産を守り、漁村のまちづくりに尽力した人びとの輪は、途切れることなく脈々と継承されてきたのである。



# 青木繁『海の幸』誕生の家・小谷家住宅の保存活動

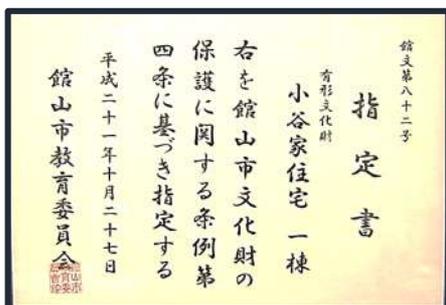
NPO法人安房文化遺産フォーラム 事務局長 池田 恵美子

## 1. 小谷家住宅を文化財に

小谷栄氏の発言により、小谷家住宅を保存・活用する機運が生まれた。2007（平成19）年、文化財建造物専門家の山田和夫氏に小谷家住宅の調査を依頼したところ、「分棟型民家の釜屋部分が改造されているものの、居住部分はほぼ旧状を保っており、明治期の大火後に耐火機能を考慮した復興建築として価値がある」と診断された。

この調書に基づき、当主より館山市教育委員会へ「文化財指定申請書」を提出し、NPOフォーラムと同地区連合区長会とが連名で「小谷家住宅と記念碑の保存・活用に関する要望書」を館山市長と教育長に提出した。

並行して、同地区コミュニティ委員会の役員や市内外の賛同者、全国の美術関係者らに呼びかけ、金丸謙一館山市長と石井達郎教育長とともに96名が発起人に名を連ね、2008（平成20）年、青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会（以下、青木保存会）が設立された。直後に吉田昌男会長が急逝し、嶋田博信が会長職を継承した。事務局はNPOフォーラムに付託され、運営委員30名によって保存管理・地域振興・広報普及・募金会員拡大の活動が進められることになった。



翌年、小谷家住宅は館山市指定有形文化財となったが、次の箇所の修理が必要と指摘された。

- (1) 正面本体・庇間鉄板を撤去して本来の軒廻りを表す。この際には庇屋根取り付き部及び本体部軒廻りの修理が必要となる。
- (2) 正側面大壁、海鼠壁の補修・復原
- (3) 背面瓦屋根及び木部補修（緊急性あり）
- (4) 屋根棧瓦葺きの葺替

青木保存会は、当主栄氏と覚書を交わして、小谷家住宅の管理者となり、維持修理に関する所有者負担を軽減する支援体制を検討した。

私有財産の住宅を保存・活用するにあたり、小谷栄氏の長女夫妻と話し合いがもたれ、快諾を得た。女婿の小谷福哲（ふくあき）氏が定年退職後に転勤先から館山に戻ることにになったのを機に、当主として活動に加わることとなった。

かねてより、女子美術大学の吉武研司教授や画家の吉岡友次郎氏らは、美術振興の聖地として小谷家住宅を後世に残したいと考えていた。青木保存会の意向に賛同し、修復基金創出のために全国の画家や美術関係者に呼びかけて、NPO法人青木繁「海の幸」会（大村智理事長、以下「海の幸」会と略）を2010（平成22）年に設立した。こうして、青木保存会と「海の幸」会の二人三脚が始まった。

（小谷福哲氏と大村智理事長）



## 2. 小谷家住宅の修復計画

「海の幸」会設立にあたり、修復基金の目標額を設定してほしいと要望があった。母屋に暮らしていた小谷栄夫妻の住まいについて検討した結果、古い物置を増改築して管理棟とし、そちらを住居とすることになった。

見積りは館山市文化財審議会委員の日塔和彦氏に依頼し、母屋の修復費と管理棟の増改築費とを合わせて、総事業費4,600万円が算出された。

2011（平成23）年3月、東日本大震災により募金活動は自粛せざるを得なくなった。これに伴い、募金目標額も見直しを余儀なくされ、設計監理費など1,000万円が削減され、総事業費3,600万円となった。「海の幸」会ではチャリティ展が発案さ

れ、翌年から青木繁「海の幸」オマージュ展が全国巡回となり、計13回開催された。

一方、青木保存会の要望により、館山市ふるさと納税において「小谷家住宅の保存・活用に関する事業」を指定できる寄付制度が整備された。これにより、オマージュ展の売上や賛同者からの寄付を受けやすくなり、募金活動に弾みがついた。



こうして文化財保存のまちづくりは民官協働となり、小谷家当主・青木保存会・「海の幸」会・館山市教育委員会生涯学習課は「四者協議会」として、小谷家住宅の修復・公開に向けた話し合いを全11回重ねてきた。この経緯において館山市は、先に削減となっていた設計監理費560万円を補助金と決定した。これを含め、総事業費は4,300万円となった。

教育委員会を除く三者で「修復と公開に関する覚書」を改めて交わし、2016（平成28）年春の一般公開を目ざして2ヶ年の修復工事にとりかかることになった。施工は菅田建築、設計監理は中村社寺設計事務所となった。

### 3. 青木保存会のまちづくり活動

青木保存会では、定期総会をはじめ、年4回の役員会と運営委員会のほか、会報やホームページの広報、記念碑の草刈、ウォーキングガイド、郷土料理教室などを行ってきた。活動経費の主たる収入源は、会費と寄付である。

2009（平成21）年、事務局を担うNPOフォーラムが、国土交通省の「新たな公」によるコミュニティ創生支援モデル事業に選定された。文化財アドバイザー会議の開催、伝票つき入会案内書、ウォーキングマップや漁村のレシピ集『おらがご

つつお（我が家のご馳走）』の作成などを実施した。活動を周知し、地域住民の理解を得るために、これらを富崎地区全戸500世帯に寄贈配布した。国交省事業は3ヶ年の予定であったが、政権交代による「仕分け事業」のため、残念なことに単年度で終わってしまった。

没後100年にあたる2011（平成23）年、東日本大震災の直後ではあったが、青木繁の命日祭「けしけし祭り」に参加するため、小谷福哲夫婦と青木保存会の役員ら数名は福岡県久留米市を訪れた。久留米市役所・青木繁旧居・石橋財団石橋美術館などを表敬訪問し、親睦を深めた。以降、青木繁旧居保存会（荒木康博会長）や在京久留米市民の「くるめつつじ会」などと交流を図ってきた。

同年より4年間、文化庁の「文化遺産を活かした地域活性化事業」に選定され、研究者を招いたシンポジウムや調査研究、文化財建造物保存活用の先進地視察、「館山まるごと博物館」のパンフレット・ガイドブック・DVD作成、論文集『ヘリテージまちづくりのあゆみ』発行など、多彩な活動を展開してきた。

修復事業に着手した2014（平成26）年、NPOが地縁団体や行政機関等と連携して地域の課題解決に取り組んでいる優れた活動事例として、千葉県より「ちばコラボ大賞（千葉県知事賞）」を授与された。

2015（平成27）年、文化庁より「NPO等による文化財建造物の管理活用事業」の委託を受け、①管理マニュアルの作成、②管理活用のための事業計画の策定、③管理運営に関する講習会、④財源確保のための広域ネットワーク構築に取り組んだ。具体的には、2016（平成28）年春の公開に向けて、準備委員会の開催、環境整備や展示設営のワークショップ、管理運営や文化財解説の講習会、事業報告・講演会、本報告書の作成などを実施し、大きな成果を得た。

### 4. 小谷家住宅の修復工事

文化財部分（母屋）を半解体で修復するにあたり、管理棟は新築の予定であったが、崖に囲まれている小谷家では、県の崖条例により新築は建てられないと判明した。そこで物置を増改築し、小さな居住スペースをもたせることにした。

次に問題となったのは、トイレと排水設備の費用が計上されていなかったことである。予算外であったが、浄化槽を取り付けることとなった。また、工事見積から5年が経過しており、この間に消費税の増税や物価上昇などがあり、削減した予算では全く足りないという状況が起きていた。青木保存会では不足分を補うため、毎年少しずつ特別会計を積み立て、さらに「瓦プロジェクト」として小口の寄付も多くの方に呼びかけた。

最終的な総事業費4,300万円のうち、「海の幸」会は1,800万円、青木保存会は760万円を創出し、石橋財団から支援金1,200万円を得て、市補助金を含み、2016（平成28）年2月末に目標を達成した。

しかし、館山市ふるさと納税の「小谷家住宅の保存・活用に関する事業」では、市指定文化財の修復工事のみ対象であるため、管理棟の増改築費については、「海の幸」会から直接小谷氏への贈与となる。小谷氏の負担は、管理棟の予算超過分に加え、贈与税も課せられることになった。

このように山積する課題を乗り越え、小谷家住宅は在りし日の姿を蘇らせた。公開に向けた環境整備や展示設営については、青木保存会や連携団体のメンバーによるワークショップ形式で、整地・造園・植栽・スロープの手すり、屋内のピクチャーレールと展示照明の設置などを手づくりで実施した。これらの経費は予算外であったが、一部を文化庁事業で賄い、青木保存会の特別会計から約200万円を補てんした。

## 5. ブロンズ『刻画・海の幸』

2004（平成16）年、館山市在住の彫刻家・船田正廣氏が、名画『海の幸』を立体的に模して塑像を制作した。翌年、韓国光州市立美術館名誉館長の河正雄（ハ・ジョンウン）氏は館山を来訪した際、青木繁『海の幸』誕生の舞台であることを知り、船田氏の『刻画・海の幸』にも感動したという。青木保存会設立時には発起人の一人となり、10数年にわたって親交を深めてきた。

2016（平成27）年、第19回戦争遺跡保存シンポジウム千葉県館山大会の記念講演者として河氏が再来訪。旧交を温めるうち想いが深まり、戦後70年と日韓国交正常化50周年記念に『刻画・海の幸』をブロンズ鑄造し、日韓の美術友好交流の証

として寄贈したいと英断された。紆余曲折を経て、日本では館山の小谷家住宅と久留米の青木繁旧居、韓国では光州市立美術館分館河正雄美術館・靈巖郡立河正雄美術館・ソウル秀林アートセンターの5ヶ所に「河正雄コレクション」として設置されることになった。



鑄造を担当した埼玉県川口市の岡宮鑄造は、札幌の「クラーク像」や長崎の「26聖人像」などを手がけた第一人者。台座制作は館山市の俵石材店で、先祖の俵光石は高村光雲に高く評価され、東京美術学校で石彫の教師を務めた人物である。ともに河氏と船田氏の理念に共鳴し、採算度外視でこの壮大なプロジェクトに加わって下さった。

## 6. 複製画『海の幸』『わだつみのいろこの宮』

ときを同じくして、館山市のアートプロセスより2点の複製画が寄贈された。制作者の島田吉廣氏は国内に現在3人しかいないというカラスキャンナー1級技能士（労働大臣認定）の資格保有者である。何度も実物作品を丹念に観察し、実際の色彩を忠実に再現した。特に注力したのは、『海の幸』では漁師の灼けた肌と夕陽の輝き、『わだつみのいろこの宮』では海中の青味がかかった色調と衣装の透明感であるという。

複製画も、一つの美術作品といえる。青木繁と同じ空気を吸える旧家で、実物に近い青木作品を堪能でき、写真撮影もできる。隣接した布良崎神社では、『海の幸』のイメージソースになったと考えられる神輿も楽しめて、2つの鳥居の間に富士山も拝める。地域まるごと美術館である。

小谷家住宅は命を吹き込まれ、2016（平成28）年4月より青木繁「海の幸」記念館として公開される。多くの人の努力と想いが寄せられ、画壇の聖地といわれる布良は、これからも多くの人びとに癒しと安らぎと蘇りの力を与え、まちづくりの聖地となっていくにちがいない。